

信州での合宿帰りらしい学生の一団が、電車の中でべちゃくちゃ喋^{しゃべ}っていた。ごつい体と話の内容からしてどうやらラグビー部に属しているらしいのだが、やがてかれらはコーチや先輩たちの欠席裁判を始めた。耳を傾けていた私は、あることに気がついた。それは、かれらの人物評価の基準が《優しさ》で一致していることだった。頻^{ひんぱん}繁に《優しさ》を口にする。「あの先輩は優しい人だよ」と言い、「あのコーチはちっとも優しくないんだよ」と言う。あたかも優しさがすべてでもあるかのような言い方をする。

気持ちのわるい連中だ、と私は思った。男のくせに何という恥知らずな言葉をつかうのか、と胸のうちで呟^{つぶや}いた。《優しい》という言葉が好きなのは、むかしから女と相場がきまっていたものだ。たとえば、「どんな男と結婚したいのか?」というアンケート的な質問に対して、彼女たちの大半はかならず「優しい人」という条件をつけたがる。ただ問題なのは、彼女たちが考えている優しさの中身で、要約すると、ありとあらゆるわがままを許してくれる男、そんな厚かましい意味がこめられているようだ。自分のことは棚^{たな}にあげておいて、相手の優しさの有無にとってもこだわる。虫のいい話だ。

自分からは与えず、相手からは貪欲に奪う。これこそ《やらずぶったくり》の薄汚い根性のあらわれなのだが、それを優しさといういかにも響きのいい言葉でのべつ表現しているうちに、本人自身もよしとして、大つぴらにばらまくようになった。かくして優しさの大流行となり、学生のみならず、職場の男たちまでが唯一無二^{しきど}の尺度として、切り札でもあるかのように優しさを連発し始めたのだ。エゴのかたまりみたいな奴に限って、それをさかんにまくしたてる。奪うがための打算的な優しさであるが故に、かれらの人間関係は次第にぎすぎす、ががつした方向へと傾いてゆき、足の引っ張り合いばかりが目立つようになり、しまいには優しさとまったく無縁の集団となる。

(丸山健二「うさん臭い《優しさ》」『安曇野の強い風』文藝春秋社より)

問 本文をもとにAさんからDさんまでの四人が感想を述べました。筆者が言いたいことに最も近い発言をしている人物を、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

30

Aさん 「私は、優しさとは人に対して思いやりの気持ちを持つことだと思います。人を好きか嫌いかで見るのではなく、嫌いだなと思う人でもどこかにいいところはあるのだから、それを見つけ出せるように努力しなければならぬと思います。」

Bさん 「私は『優しい』という言葉が好きなのは女だ』という主張に賛成できません。現代は男女平等の世の中ですから、このように男だから、女だからという基準で『優しさ』という言葉の使い方を決めるのは、考え方としてよくないと思います。」

Cさん 「私の部活動の先生はとても厳しくて、特に練習以外のこと、あいさつをするとか、落ちているゴミは拾うとか、身だしなみをきちんとするとか、とてもうるさく注意されました。でもそれは、将来社会に出たときに困らないようにするために言われていたことだと、今では思えます。」

Dさん 「私の思う優しさは、どんなに腹が立つ相手にでも、努めて優しくすることです。そうすることで、相手の人も優しさに気づいてくれて、自分に優しさを返してくれるようになると思います。」

ア Aさん イ Bさん ウ Cさん エ Dさん

(問題はこれで終わります。)